モリ（モロ）と「社」

—ヤシロの基礎的考察 その3—

正会員 木 村 徳 国

まえがき

小稿は、学会論文報告集中、拙論「ヤシロの基礎的考察。その1（第322号）、その2（第326号）」に続く「その3」で、第IV章にあたる。序章（I）に提出したヤシロのイメージと範疇に関する三角形の底辺の2極—「モリ（モロ）」と「ホクラ」—のうち、前者をとりあげたものである¹⁾。文献的に古代のヤシロのイメージを追う作業の一端にはかならず、同時に、上代語モリの語性をかえりみることにつながった。

底本として、記・紀・万葉集・風土記ともに、日本古典文学大系本に準拠し、万葉集は、小学館日本古典文学全集本を重く参看している。

小論は、次の5節よりなっている。

- §1. ヤシロのイメージのひろがりともリ。
- §2. 上代四文献におけるモリ。
- §3. 「社」—紹介を中心に—
- §4. モリの聖性とモロ（特にミモロ・ヒモロキ）。
- §5. モリ（モロ）のイメージと「社」。
- §1. ヤシロのイメージのひろがりともリ

第II・第III章で、筆者は、上代四文献中のヤシロの全語、および関連する記述から追いつける大概を拾ってきた。そこでは、序章中にもふれたように、ヤシロのイメージそのものを記述するものはきわめて少なかった。が、当時の全国に無数²⁾に存在したヤシロを論ずる上で欠かせぬ、幾つかの点を明らかにし得た。特に注目すべきは、以下のごとき諸点である。

- a. ヤシロの設立とは、神をマツる一つの形式にほかならぬが、その最大のものとして把握し得ること。
- b. ヤシロそのものは、「神のいますところ」として、
- c. 人間の側が主体的に参加して「定め立て」たもの、として記述されていること。

以上は、イメージに関連しては間接的なものにすぎぬけれども、ヤシロを考察する基礎として忘れ去られてはなるまい。また、ここに、ヤシロ以前—特にその空間構成的なもの—からヤシロへの、連続と発展とを論ずる根拠が整ったのである。

次に、ヤシロのイメージそのものに関連しても、次のごとき諸点が浮上してきた。

- d. 立地点の位置のひろがりはきわめて広く、
- e. 多くは、地点的であるより境域的なものとしてみえている。
- f. 特殊な名神大社の場合を除き、（通例の仏教寺院の場合とは違って）、一般の小社では、特に神職の常住する建物を、ヤシロのうちに想定する必要はない。加えて、関連記述に特に目立ち、ヤシロのイメージの構築に大きく働くのは、次の3者である。
- g. 立地点の性格その他より推定して、きわめて非人工的・自然的なあり方のものの存在が想定できる。
- h. 一方、神体ないし、奉献された神宝。また神社名より推定して、きわめて人工的・建造物的なヤシロの存在が想定できる。（ホクラ。第V章にふれる。）
- i. 建築的なものの極として、その名称が物語るようにカムミヤ（神宮）という少数の一群の存在が想定できる。（カミノミヤ。第VI章にふれる。）

そして、以上3者を根拠に、序章中、筆者は、イメージと範疇にかかわりつつ、「ヤシロの三角形」という図式を提案したのであった。

本章では、特にgを中心にとりあげようとするのであるが、まず、d・eの2者につき瞥見しておく。それはおのづからgを引き出すことにつながるであろうから。

d・eの2者は、「上代四文献とヤシロ」に掲げた表1～4にも、およそ浸み出している。その立地点につきいえば、上代のヤシロの位置のひろがり、きわめて広い。山頂（峯）にあり、山本にあり、山口にあり、森にあり、山野のうち、里のうち、浦辺・海浜・川辺、島のうち、岩窟の中、等々である。これらは、資料中偶然に上ってきた傾向を否み得ぬとしても、位置のひろがりの広さそのもの、が目射る。逆にいうと、神のいます所である聖地の空間構成のあり方の広さ、をこれは物語り、一・二の単純な類形では、イメージを構築し得ぬであろうことを予想せしめる。

また、以上のうち、山頂のごときは、いかにも地点（スポット）的であるが、（そして「磐座」のごときは、まさにスポット的であるが）、一般には、かくのごときも

* 明治大学 教授・工博

（昭和57年9月11日原稿受理日、討論期限昭和58年9月末日）

の場合でも、「マヒ（幣）」を捧げて神を祀るほどの幾ばくかの地域的ひろがりを持ったであろうことは、推定できる。また、たとえば「峯」に存するヤシロの場合でも、

神(立速男命)^{タキハヤノミコ}、禱告を聴きて、遂に賀毗礼の峯に登りましき。其の社^{ヤシロ}は、石を以ちて垣と為し、中に種属甚多く、并、品^{ツケ}の宝、弓・梓・釜・器の類、皆石となりて存れり。(風土記常陸国久慈郡)

のごとき、より古き時代の古墳の別区³⁾、ないし祭祀場のごときはみえ、境域的である。同じく、海浜の岩窟中のごとき(加賀社。風土記出雲国嶋根郡加賀神崎条)も比較的珍しい例ではあろうが、それなりのひろがりを持ったと見てよからう。

かく、一般的には、ヤシロは境域的とみてよさそうであって⁴⁾、多少の例をいえば、風土記常陸国行方郡の夜刀神の場合、「山の口」の堀に「標^{シロシ}の税」を立て、それより「上」をそのヤシロとされていた。また、神武前紀に「天香山のヤシロ(社)の土を取り」といい、斉明紀五年では、言屋社に「死人の手臂を狗が噛い置」いたのである。加えて、「ヤシロの樹木」をいう例は、後に示すように、きわめて多かった。ただし、これらのヤシロの大多数には、fにふれたように、その中に神職の住む建物をいうことはなく⁵⁾、神戸等につきいわれる場合も、ヤシロの周辺、つまり外側に居住したと考えられる⁶⁾。

さて、以上のように境域的なものとしてみえ、かつ、人工を云わぬ諸例のうち、特に神とかかわる聖なるものとして大きく浮かび上るのは、おそらく「モリ」として一括し得られるであろうところの、山であり、森であり、そして聖樹である。これらを、モリ(モロ)として一括することには、すでに聖性を失った(ように見える)現代語「森」に慣れ親しんでいる現代人としてのわれわれに、ある抵抗感があるかもしれぬ。

しかしながら、上代四文献中のモリ(モロ)の全語を

抽出し、その語るところを聴く時、筆者は、上代語「モリ(モロ)」そのものの意義が、現代とは全く異なり、イメージにおいても、上にふれたごときひろがりを持つと同時に、その聖性—神とのかかわりの深さ—において「モリ」はあったのではないか、という見解を、明確に抱くようになった。つまり、上代語モリそのものを、ヤシロ(そして、ヤシロ以前)とのかかわりの見地から見直すことになった。そして、ヤシロの範疇とイメージのひろがりの三角形の底辺の一極に、これを設定することになったのである。

§2. 上代四文献におけるモリ

上にふれたモリの聖性については、精疎の差はあれ、手近に存する国語辞典におよそふれられてあり、古くから注意されてきたことである。いま、現代の上代語辞典の2者をとっても、『時代別国語大辞典・上代編』は、「①こんもりと木の繁ったところ。森。②神の憑りつく木や林」(引例省略)とされ、その「考」には「コソ」⁷⁾についてもふれられている。また『岩波古語辞典』は、「樹木の茂った神社など神聖な靈域。神の降下して来るところ。」(同上)といわれるごとくである。しかしながら、この語が上代文献にどのような形であらわれているか、は、また別の問題で、以下にひとわたり瞥見をこころみる。

この場合、古事記には、モリなる語(および、「森・杜」も)みえぬので⁸⁾、万葉集・書紀・風土記を、この順にとりあげたい。

a. 万葉集(歌) さて、ヤシロとモリとの相関の密接さを、特に強く印象づけるのは、万葉集歌中のモリなる語の、表記と内容とである。ここには『万葉集総索引』を主とし、底本および日本古典文学全集本を参照して、目にふれた17例を掲げる(表—5)⁹⁾。

まず、モリの表記を検するのには、17例中、底本で「ヲ

表—5 万葉集(歌)のモリ。

語番	巻・番号	期	表 記	作 者	歌	備 考
1	二・202	Ⅱ	神 社	檜隈女王?	哭澤之、神社爾三輪須恵、雖禱祈、我王者高日所知奴、	高市皇子挽歌。
2	四・561	Ⅲ	社	大伴百代	不念乎、思常云者、大野有、三笠社之、神思知三、	恋歌四首の中、
3	七・1263		山上*		曉跡、夜鳥雖鳴、此山上之、木末之於者、未静之、	底本ヲカ。全集本モリ。
4	七・1344		神 社		真鳥住、卯名手之神社之、菅根乎、衣爾書付、令服兒欲得、	寄草。
5	七・1378		神 社		木綿懸而、齋此神社、可超、所念可毛、恋之繁爾、	寄神。
6	八・1419	Ⅱ	社	鏡 王 女	神奈備之、伊波瀬乃社之、喚子鳥、痛莫鳴、吾恋益、	
7	八・1466		社	志 貴 皇 子	神名火乃、磐瀬之社之、霍公鳥、毛無乃岳爾、何時來將鳴、	
8	八・1470	Ⅲ	社	刀 理 宣 令	物部乃、石瀬之社乃、霍公鳥、今毛鳴奴(香)、山之常影爾、	夏雑歌。底本(香)なし。意味大きく変る。
9	九・1679	Ⅱ	社	坂上人長?	城国爾、不止將往來、妻社、妻依來西尼、妻常言長柄、	
10	九・1731	Ⅲ	社	藤 原 宇 合	山科乃、石田社爾、布麻越者、蓋吾妹爾、直相鴨、	
11	九・1751	Ⅲ	社	虫 鷹 集	山下乃、風莫吹登、打越而、名二負有社爾、風祭為奈、	長歌部分。
12	十・1850		森		朝旦、吾見柳、鶯之、來居而必鳴、森爾早奈礼、	詠柳。
13	十一・2839		社		如是為哉、猶八成牛鳴、大荒木之、浮田之社之、標爾不有爾、	譬喩。底本は成を戌とし、「守る」とする。
14	十二・2856	Ⅱ	社	人 鷹 集	山代、石田社、心鈍、手向為在、妹相難、	寄物陳思。
15	十二・3100		社		不想乎、想常云者、真鳥住、卯名手乃社之、神思將御知、	卷四—561・655と類歌。
16	十三・3236		社		山科之、石田之社之、須馬神爾、奴左取向而、吾者越往、	長歌部分。
17	十六・3881	Ⅳ	森徑*		大野路者、繁道森徑、之氣久登毛、君志通者、徑者広計武、	底本モリミチ、全集本シゲミチ。

カ」と訓まれる「山上」（語番3）は、全集本では「モリ」とされており、底本で「モリミチ」と訓まれる「森径」（語番17）は、全集本では「シゲミチ」とされ、一定していない。で、定訓と遇し得る15例をとると、「社」11、「神社」3、「森」1、という結果を得る。（後にふれるように、書紀・風土記において、「モリ＝森」である用例をみないので、上の結果は、万葉集歌の「森」の用字の意味につき、あらためて考えさせられることになる。）

「社・神社」が上代語ヤシロとまさに直結するものであったことは、すでにふれた。しかもこれが、同時にモリと直接していたとすれば、用字を媒介とする外側的なものであるにせよ、ヤシロとモリとの濃き親近性は、決定的なものとして扱えられよう。

このことは、歌の内容からも一すなわち内側からも一いよいよ補強されるのであるが、例数が多いからこの件は後にまわし、先に他文献をみておきたい。

b. 日本書紀 底本書紀訓文中のモリを探ると、僅かに3語ほどを見いだす。用字は、表音表記のほか、「社・杜」であって、「森」はみえず¹⁰⁾、また書紀歌謡128首にも、モリをみない。ここに全例を引く。

- イ. 是の時に、スサノヲ尊、其の子五十猛神を帥ゐて、新羅国に降^{アツク}りまして、曾^{ソノ}戸茂梨^シの処に居します。（ただし、「此の地は吾居らまく欲^カりせじ」として、土舟を作^{ツク}て、東に渡^{ワタ}って、「出雲国の簸^ハの川上に所在^カる、鳥上の峯に到る。」）神代上第八段一書第四。
- ロ. 六年の夏四月に、難波吉士磐金、新羅より至りて、鵲^{ツクツ}二隻を献る。及ち難波社に養^カはしむ。因りて枝に巢^カひて産めり。（推古紀）
- ハ. （九月九日）朝^{イナハ}婦に幸す。因りて大山位より以下の馬を長柄社に看^ミす。及ち馬的射^カさせたまふ。（天武紀九年）

上引中、（イ）については後にまわす。（ロ）は用字「社」であるが、国史大系本では「杜」。（ハ）は、底本・国史大系本共に「杜」である。ロ・ハの2者共に、記述中にモリの聖性は浮き立ってはいけなけれど、底本頭注は、

前者「通証・集解は摂津志により、東生郡森村の森神祠とし、通釈は同郡生国魂神社とする」こと、後者は「延喜神名式、大和国葛上郡長柄神社。今、御所市名柄所在」であることを教えらる。鵲や騎射を神に捧げる意味を持ったのかも知れない。加えて、（ロ）の記述から、モリのイメージの一端として、樹木の繁茂する姿を想定することができる。

なお、ここで「杜」につき一言しておけば、この字（語）の中国での原義は、『大漢和辞典』によるのに、名詞としては「やまなし＝こりんご・あかなし」であり、動詞としては「とちる＝ふさぐ、とざす、たつ、つく」などであって、「モリ（森）」の意を本来は持たぬ。書紀中十余字を見いだすのであるが、動詞例には「門を杜^サして出でず」（皇極紀四年六月）の1例があり、他の多くは「杜木＝可豆羅^{カツラ}」（神代紀第九段本文、天稚彦説話の訓注）として、「杜木・杜樹」の形で、この説話および海宮説話（同上第十段）に集中的にみえている。底本頭注は「杜」と「桂」との「誤用によるらしい」ことをいわれる。

しかしながら、「杜」が「モリ」と訓まれたことは、比較的に確実で、現代でも「杜」はわが国で「モリ」と訓まれるし、人名にも「大伴杜屋連」（天武紀六年六月）がみえていた。わが国でモリと訓まれることにつき、『大言海』は「社木の合字」といわれる。とすれば、「社」の樹木を主体とした表現として受けとれよう。そして、上の人名から、遅くとも7世紀の末には、かかる利用が発生していたことが知られる。なお、想像の一步を進めると、万葉集の「森」の用字法の存在を考慮しつつ、「特には聖ならざるモリ」の、8世紀での発生をも、考えさせられる件となっていた。

c. 風土記各国 底本各国に、播磨（2件2語）、常陸（2件2語）、出雲（2件3語）、肥前（1件1語）、計7件8語ほどをみいだすであろう。その用字はすべて「社」による。記述を第6表に簡単に示しておく。

表一6 風土記各国のモリ。（用字はすべて「社」による。）

文献中所在	件番	語番	記述	備考
播磨国 揖保郡・広山里	1	1	所以名都可者、石竜比売命、立於泉里波多為社而射之、到此处、箭盡入地、唯出握許、故号都可村、	石竜比売命、
美濃郡首	2	2	所以号美濃者、昔、大兄伊射報和氣命、堺国之時、到志深里許曾社、勅云、此土、水流甚美哉、故号美濃郡、	履中天皇
常陸国 新治郡・笠間村	3	3	古老曰、古有山賊、名称油置売命、今社中在石屋、	「俗歌」中に「伊波婦（石城）」
行方郡・郡東国社	4	4	郡東国社、此号泉祇、社中寒泉、謂之大井、縁郡男女、会集汲飲、	泉祇
出雲国 意宇郡首	5	5・6	（八束水臣津野命）、意宇社爾、御杖衝立而、意恵登詔、故云意宇、〔所謂意宇社者、郡家東北辺、田中在塾是也、围八步許、其上有一以茂〕	八束水臣津野命、
秋鹿郡・足高野山	6	7	高一百八十丈、周六里、土体豊沃、百姓之膏腴之園矣、無樹林、但上頭在樹林、此則神社也、	神社
肥前国 基肄郡・姫社郷	7	8	（可是古）、便即举幡、順風放遣、干時、其幡飛往、墮於御原郡姫社之社、更還飛来、落此山道川辺之、	姫社女神

(関連して、先に他字を見ておけば、「杜」は、播磨国神崎郡末に、「カツラ＝桂」と訓まれる 1 例、出雲国に「杜仲＝ハヒマユミ (植物名)」の 4 例ほど、および同国秋鹿郡に「杜原池」がみえるのみである。また「森」は、常陸国行方郡に「森々」、播磨国揖保郡に「森然」の用例がみえるけれども、共に「いよよか」と訓まれ、「丈の高いさま」とされる。すなわち形容詞としての用法で、モリの意としては用いられていなかった。)¹¹⁾

すなわち、風土記の諸国では、すべてのモリ(森)が「社」によるために、原文にかえると、ヤシロと訓むべきか、モリと訓むべきか、判断はきわめて難しい。(但し、出雲国においては、各郡に「在神祇官・不在神祇官」に分けた神社名リストがある。これによって、リスト中に関連するものをヤシロ、以外をモリと訓む一応の基準を得られる。)

上を裏がえしていえば、ヤシロとして訓まれようと、モリとして把握されようと、筆録者はそれほど意に介さなかったことを示す。それは直ちに、実体としてのモリとヤシロの近しさを明示するものとして受け取ることができる。万葉集の場合の用例とも極めて近く、8 世紀人における両者のきわめて密接なつながりをよく物語っていた。

以上、上代四文献を通じて、モリの用字は決定的に「社」であり、「杜」もこれに引かれてモリに転化しつつあったと捉えることができる。

§3. 「社」—紹介を中心に—

それでは、モリと(ヤシロと)「社」とは、何故に結びつき得たのであろうか。モリのイメージを探るためにも、われわれは漢字(語)「社」にひとまずもどる必要を覚えるであろう。

この時、「社」の起原を探究する研究は、E. シヤヴァンヌ教授『泰山誌』(仏文)の附編「上代支那の地神(社)」1910 を、まとまりある早きものとして、以後、わが国の中にも、長い研究史があるようにみえる。

小論で筆者が参考にしたのは、その中の主要とされる¹²⁾以下の 4 編にすぎぬが、それらによっても、上を十分うかがうに足る。

- A. 出石誠彦「社を中心として見たる社稷考」1934。早稲田大学文学部哲学年誌第 4 号。
- B. 関野 雄「中国古代の樹木思想」1948 (1956)。民族学研究 14-2¹³⁾。
- C. 守屋美都雄「社の研究」1950。史学雑誌第 59 輯第 7 号。
- D. 松本雅明『詩経諸篇の成立に関する研究』1958。その第 8 章第 4 節。東洋文庫論叢第 41。

これらは、いずれも長文のもので、論者のヴェクトルに差異はあり、結論に怪疑はみられる。が、それぞれに研究史をふまえ、一たとえば、A は既往の主要な 4 論文を、C は同じく 11 論文を、詳しく紹介すると共に批判しつつ—加えて中国古代文献より多くの証を挙げつ

つ、論を展開される。

ここに、中国古代文献とは、春秋・戦国のいわゆる三礼・五経と諸子、および、それらの漢代(後漢をふくむ)の諸注疏を主とするものであり、また、必ずといってよいほど、甲骨文における「社と土」との関連がふりかえられている。で、この方面に全く暗い筆者は、論の当否を論ずる資格をもとより欠く。が、ようやく読みとり得た内容を筆者なりに整理して、簡単にまとめておきたい。

はじめに「社」の原初の発生起原説につきふれば、あくまで概括的にまとめて、次の 3 者を、小論における「社」の起原説としてよいであろう。

- I. 叢林ないし樹木崇拜。
- II. 原始的聚落の標識としての束木崇拜。
- III. 土地神(あるいは祖神)を祀る聖地崇拜。

先掲 4 論文では、A・B 2 論が I に従がわれる。シャヴァンヌ説を継承発展させられたものとみることができ。加えて A 論文は「社の原形は呪術的儀式を行う民間信仰の場所」(津田左右吉博士説)をも包摂されようとしている。一方、C・D 論文は II の立場をとられる。そこには、「社」の歴史的研究を通じて「中国(古代)社会の下部構造を把握」(C)したいという視点が明白にうち出されていた。

かくの如く、先掲 4 論文では、III の立場はむしろ捨てられているのであるが、あえて「小論での」をお断りをした上で、筆者が III を付加したのは、幾つかの理由がある。第 1. 中国古代文献の直接的に語る「社」は、III(「社」の原初の起原説としての当否はさておき)と結合した以後の段階が主であり、I・II は、起原を厳密に探究しようとする立場から、論者の視点のヴェクトルにもよりつつ、この段階以後より溯及・推定の歩を進められた研究であるようにみえることである。第 2. 甲骨文中、「社」は直接的にみえぬようであるが、その「土」を相通ずるものとして捉える説—これはひいて III につながる—は多数みえる。しかも第 3 に、時代はおくれるが『説文』に、「社」の古字として、ヘンに、神をあらわす「示」をとり、ツクリに、下に土を置き上に木を立てた形が示され、すでに「社、地主也」とみえることである¹⁴⁾。加えて、いま、わが国でのモリなりヤシロとしての「社」の利用を考える際には、そのタイムラグにより、むしろ III を加えておく方が、おだやかであろうと筆者は考えるのであって、これが第 4 の理由である。しかも、上 3 者(I・II・III)を包括的に眺める時、すべて聖なるもの、または神、に結びついた場所、であって、形而上のことであるにしても、わが国のヤシロとの関連の深さが思われよう。

さて、あらためて、小稿でとりあげているモリ(とヤシロ)にかえろう。すると、上にみた「社」の具体的なイメージそのものが問題となる。この場合、諸論を通じて筆者なりにまとめると、戦国末より漢代以降のイメー

ジとなろうけれど、およそ天空にひらかれたものであって(ただし「亡国の社」を除く)、小墳ないし土壇の上に、あるいは「樹木(単・複)」、あるいは「柱または束ね柱」、あるいは「石ないし石柱」、のごときをたてたものとして把握し得られるであろう。

ここに「小墳ないし土壇」とは、すでに『周礼』中「社稷之壇」としてみえ、鄭玄は「壇壇与埤埤也」と注している。特に、下にいう「樹木」と強く結びついていたようにみえる。(なお、「社」における土壇の方を重視する説も存し、土地神起原説に結びつく傾を示す。)

この壇上に、「社」の標識として目立っていたのは、文献中、特に樹木である。樹種には、松・栢・栗・槐・櫟等がみえ、特に限定されていない。「所の土に宜った」もので、かつ「脩茂」なるものが撰ばれたらしい。また、単木には限らず、叢木の例も多かった。C論文は、「叢社・叢社大祠・大叢社」等をその例とされる。(この樹木の方を重視する考え方が、叢林起原説へつながる。)

一方、標識としての「柱」は、上の樹木の表徴と扱えられるのが一般であるが、特にC論文は「社」そのものの起原として「束木」ととられる。これは『晏子春秋』その他にみられる名高い「社鼠」の説話に根拠を置くもので、原始聚落の標識より発達したものと解せられる重大な理由となっていた。

また、石を主とする「石社・石祠」に多くふれられたのはC論文で、「山東方面に縁が深い」ことを注意されつつ、あるいは「怪石」(「好石の玉に似たるもの」・「珍奇な石」)とも考えられるとされている。なお、柱であり石である「石柱」の場合もあって、B論文の附記は、関野博士が「済南省立図書館を訪れた際、実見」されたところの、犠牲を縛りつけ、豎筋が彫られていて束木を象どったかと思われる漢代の「高さ2.5~3.0m、直径30~40cm程の石の円柱」のことが紹介されていた。

このような「社」は、国ごとに、王家ごとに、諸侯ごとに、そして、下っては里ごとに存したので、その数はきわめて多かったらしい。すなわち『説文』所引の『周礼』には「二十五家為社」とみえ、他文献も25家をいうのが一般であるが、「五家・十家」より「百家」、またこれ以上とする記事もみえ、「社」には大小が存したのである。(なお、現代日本語の「会社、結社、社会」などに通ずる「くみあい」の意も、ここから発生するのであるが、一切を省略にしたがう。)そして「社」においては、家畜を捧げて部落の祭はおこなわれ、また、日蝕・旱魃・降雨・出師などに際して祈願がなされ、ある場合には、誓約・神判さえ執行されたことが知られていた。

以上、諸論の精緻な拳証、精密な展開を省略した、きわめて一方的な紹介にすぎぬのであるが、中国古代の「社」と、わが国のモリ(およびヤシロ)との、神を媒介とする緊密な結合、そこにおこなわれる行為の相同性、

はあきらかである。加えて、わが国のモリ(モロ)を以下のごとく見渡すとき、イメージの相似性に驚かれるのであった。

§4. モリの聖性とモロ(特にミモロ・ヒモロキ)

イメージの問題は後にまわし、ここでは、はじめにモリの聖性につき一瞥したい。もっとも、ここに「聖性」とは「神とのかかわりの濃さ・神との親近性の強さ」というほどの意味にすぎぬのであるが¹⁵⁾、上代語モリが、前節にみた漢語「社」を以て用字されたこと自体において、外側からすでに示されていたといえる。そして、内側からこれをもっとも端的に物語るのは、第5表に掲げた万葉集の歌の場合であり、風土記のモリの全件である。

前者について、詳しくは原歌に当たりたいが、幾つかの例につきふれるなら、すなわち、第1例は「モリに神酒すゑ祈る」といい、第5例は「木綿かけて斎ふこのモリ」、第10例は「ヌサ置きて」、第11例「風祭りせな」、第14例「手向けす」という。また、直接モリの神をいうものに、第2・第16例があり、「カムナビのモリ」というものに第6・7例がある。その他「標」をいうもの(第13例)、「妻を願う」(第9例)ものなどがみえる。そして、特に聖性の感ぜられぬもの、定訓と考えられる15歌中にも、第4・第8・第12例がみえぬのではないが、第4例のモリは「神社」と記されていて、表記において神とのかかわりが語られていた。この神とのかかわりの深さは、万葉集中「ヤシロ」を含む歌(第3表参照)の場合にも優るといえて驚かれるのである。

このことは、風土記における全7件(第6表)においても同じく、「大兄伊射報和気命」(第2件・履中天皇)や「山賊・油置売命」(第3件)を、その「命」によって神として遇し得るなら、全件が神とかかわって存したのである。

また、日本書紀の場合、既にみたように、3件中2件(第2・3件)には特にかかわりがみえなかったが、ふれなかった第1件とは、高天原を遂われたスサノヲが、「其子五十猛神を帥ゐて、新羅国に降到りまして、曾戸茂梨の処に居します」(神代第八段一書第四)とある件である。このソシモリの意義・所在については詳しい頭注(底本紀上, p. 126)がみえる。が、おそらく上代人は、モリと神とのかかわりによって、何の不思議もなく、これを受容したであろうことが思われるのである。

以上を通観するのに、上代語モリの聖性は、加えることなく明白であるといってよからう。

さて、上に筆者は、おそらくは新羅に所在したであろうソシモリのモリをも、上代日本語モリとの関連で扱ったのであるが、モリという語そのものが古代朝鮮語とかかわりがあり、国語学者は「朝鮮語 moi(山)の古形 mori と同源」(底本万葉集 1850 頭注等)と教えられて

いるからである¹⁶⁾。

すると、ここに、上代語モリに、あるいは「山」の觀念が投影されていなかったかが、現実の山と森との近しさにおいて、気にかかってくる。この時、ただちに想起されるのは、神とかかわること極めて深い「ミモロの山」である。そのモロは、以下にふれるように、モリと同じくその聖性において存したかと考えられ、かつ、まさにモリと同様に「朝鮮語 mori (山) と同源。」(底本書紀神代, p. 130 頭注等) とされるものであった。モリとモロとは、上代語の音としてごく近い。加えて、語性・内容としてかくのごとく近いならば、モリにおける上代人の觀念複合として、連想上、モリのイメージとも切り離し得ぬであろう。以下、モロ、特に上代四文献中に目を射るミモロ・ヒモロキを中心に、多少の紙巾を割く。

延喜神名式下総国葛飾郡に「茂侶神社」がみえる。国史大系本の付訓(九条公爵家本による)に「モロノ」とあるから、「モロのカミのヤシロ」と訓まれたであろう。風土記出雲国飯石郡神社名リスト(不在官社)中に「毛利社(モリのヤシロ)」もみえるから、古くはモロー語で、モリと同様に独立語として存したことが想定できる。(但し茂侶神社は、いわゆる論社の一つで、現実の神社のあり方から、モロの実体を確かめることは、難しそうである。)¹⁷⁾ しかしながら、『時代別国語大辞典上代編』・『岩波古語辞典』共に、モロは見出し語とされていないことから推せられるように、上代四文献では、複合語一特にミモロ・ヒモロキの形で、神とのかかわりを強くみせていた。

ミモロについて、まずふれよう。

この語解、諸説を通じて「ミは接頭語で、靈を示す。モロは、モリと同じく神の降下してくる所。口音は乙類。」とされて、動かない。

繁を厭って文献中の位置を省略するけれども、古事記には「美母呂」(3), 「三諸山」(2), 計5度ほど、日本書紀には「美母慮」(1), 「三諸山」(5), 「三諸岳」(3), 「三諸之岳」(1)として、計10度ほどみえる。また、万葉集では、21歌に¹⁸⁾、左注中の語や「ミモロト・ミムロ」(ト)という形をふくめて、24度ほどみえる。その表記(と形と)を、「山」と「以外」とにわけてざっと示すと、次のようである。

三諸山	2	三毛侶の	1
三諸之山	2	三諸の	8
三毛侶之山	1	いつく三諸の	1
三諸戸山	1	三諸つく	2
三室山	2	三諸を立て	1
三室戸山	1	三諸は	1
将見円山	1		

風土記諸国では、ミモロという形そのものはみえぬようである²⁰⁾。

さて、このミモロ、モリと不即不離の關係にあったことは、万葉集巻第七譬論歌「寄神」に、まさに応答歌のごとくに、次の二首(のみ)が並んでいることが参考となろう。

木綿かけて 祭る三諸の 神さびて 斎くにはあらず 人目多みこそ (1377. 第4句, 全集体「イハふ」)

木綿かけて 斎くこの神社 越えぬべく 思ほゆるかも 恋の繁きに (1378. 第2句, 全集体「イハふ」)

また、モリ・ミモロに、「カムナビの」は同じように幾度かけられていた。

しかしながら、紙巾に限られるので、全例をあげて論ずることを控え、ここでは、ミモロにかかわるイメージを先だて、これをスケールにより3大別しながら論を進めたい。

第Ⅰ類 最大スケールのもの。いうまでもなく、「ミモロの山」である。文献中の語としても、先に掲げたように、「ミモロの山」が決定的に多い。(万葉集歌中の場合、「以外」が14度ほどみえたが、歌中では、山にかかるものが半数あり、全24度中の17度ほどが「山」をいう。また、記・紀の「ミモロ」で内実は「山」かと考えられるものが、何度かある。) この山は、また、「神山・神岳・カムナビ山」等と呼ばれることもあり、これらの諸例を加えると、語数はきわめて多く、ひろがりも広がる。

さて、わが国の神は、上代四文献中の語数の多さの物語るように、不思議に山を居所として撰んだ。たとえば、大己貴神の幸魂奇魂は、「今何処にか住まむと欲ふ」という問に対して「吾は日本国の三諸山に住まむと欲ふ」と答えている(神代紀第八段一書第六。古事記も同じ)。そして先に見たように、山(峯)に祀られたヤシロも多かった。また、一般詞として「山ツミ(山の神)」もあるから、降下してくる神ばかりでなく、山そのものに(その山に土着した)神は坐したのであろう。上代人にとって、山は、それだけですでに、神の居所であった。これを証するのは、もっとも古い祝詞「祈年祭」のうちに多くの山の名があげられていること、また、より端的には、九州八女県に幸した景行天皇が、「其の山の峯岫重疊りて、且美麗しきこと甚なり。若し神其の山に有しますか」と述べていることが想われる(同紀十八年七月)。

上の記述にもみえるように、一般に神山は、山容秀麗で、里近ければ小岳であってもこれを構わぬのである。が、それは、結局は、神を祀るのが人間の側だったことによるのであろう。すると、古来名高い三輪山や大和三山、近江の三上山などが想起されるが、近山であるだけに樹林は鬱蒼として茂り、ふたたびモリとの相関が考えられるのであった。

実体としてのミモロの山については、大場磐雄『神道考古学論攷』²¹⁾・『祭祀遺蹟』²²⁾や景山春樹『神体山』²³⁾に詳しいから、以下を省略に従うことにするけれども、

おわりに「飛鳥雷丘をいうか」(全集本頭注)とされる、万葉集中の美しく優しい歌(3222)を引いておこう。

三諸は 人の守る山 本辺には あしび花咲き 末辺には
椿花咲く うらぐはし 山ぞ 泣く子守る山

第Ⅱ類「神地」と呼んでおく。本来のミモロで、モリ・ヤシロと最も深いつながりを持ったと推せられる。

上にみた神にかかわる山の場合、山頂は常に「神地」であった²⁴⁾。が、三輪山(標高 467 m)・三上山(同 425 m)等の小岳をとっても、人間のスケールに比せば問題にならぬほど大きく、その一部に、「山口」や峯を拝するに都合よき場所、また、目に立つ巨木・巖のあたり、祭祀に便なる平坦地、等々がおそらく撰ばれて、特に神が降り来る場として想定され、「神地」は設けられた。たとえば、正倉院蔵「天平勝宝八歳(756)東大寺図」の御蓋山西麓の方二十丈ほどの「神地」という記入が想起される。

しかもこの「神地」は、福山博士によれば、現在の春日大社の社殿ある位置形状にそのまま、重なっており²⁵⁾、加えて、万葉集中、全く同年代の天平勝宝三歳二月頃、遣唐使の旅の安全を光明皇后以下がここに祈った時、大使藤原清河は、

春日野に 斎く三諸の 梅の花 栄えてあり待て 帰り来る
まで (十九-4241)

と歌っていて、「ミモロ」であったのは明らかである。

このような「神地」であるミモロは、もとより、山に關してのみではなく、海辺・湖沼辺・川辺に、また高原に平野に、そして里辺にも多く設けられたことは、先にいったヤシロの位置の多様性から推定される。

その空間構成的イメージに関して、資料は多いとはいえぬけれど、これをもっともよく示すのは、雄略記にみえる天皇と赤猪子のかけ合いの歌であろう。

御諸の 嚴白檣^{イツカシ}がもと ゆゆしきかも白檣原童女 (天皇。歌謡 No. 92)

御諸に つくや玉垣 つき余し 誰にかも依らむ 神の宮人 (赤猪子。歌謡 No. 94)

前歌は、神地たることをそれ自身で示す樹木をいう。後にいうモリのイメージとも重なる神地の「主」である。このイメージは、垂仁紀二十五年細注に、「倭姫命、天照大神を以て、磯城^{シキ}の嚴櫓^{イツカシ}の本に鎮め坐せて祠る」とあるにもそのまま照応するし、また、これより先、崇神紀六年、同じく天照大神を祀るために「立て」た「磯(堅)城のヒモロキ」にも対応している。但し樹種はカシには限られず、「ミモロの神の神杉(万 156)・ミモロの山に斎く杉(万 3228)」もみえる。おそらく、上代四文献中祝詞的詞章で讃えられる常緑の椿や賢木^{サカキ}等が重要な候補に上ろう。また、「主」は、樹木には限られず、「イハクラ」などを想起すれば、石も考えられる。そして、これらの象徴としての「柱」の如きも推定される。(或る場合には、

一見「主」を欠いた、砂や小石のひろがり、すなわちニハ・サニハでもあり得たであろう。が、ここには論を略す。)

後歌は、神地に築かれた「玉垣」をいう。後句に「神の宮人」というので、この場合、「神宮」にも通ずるきわめて整備されたものだったであろう。しかしながら「垣」は、後にいうモリ・ヒモロキの場合を重ねつつ考量すると、上にいった神地の「主」と、何れを重視すべきか判断に苦しむほど重い。それは一般に、神地たることを「標^{シラ}す」ものであり、ヤシロの場合には垣にかわる「標繩」(万 2309)もみえ、区画することではじめて「神のもの」であることを表現し得た、と考えられるからである。また、この区画は、おそらく「神門^{カミト}」(現代の鳥居に通ずるか)²⁶⁾等によっても象徴せられたのである。上にみた「磯城^{シキ}」も、用字よりすれば、石によって構成された区画するもの(垣なり壇なり)として把握し得られるかもしれない。

以上の具体的な構成として、念頭に、第Ⅱ類のきわめて小型のものとして、伊勢内宮院内の「興玉神・宮比神」²⁷⁾のあり方が存するのであるが、それは、「ヒモロキ」にもそのまま重なったことが考えられる。

第Ⅲ類「臨時的なもの」。おそらく上にいった第Ⅱ類の象徴的なミニアチュアなりシンボルとして、私人のすまいのうちに、臨時的に、ミモロの「立て」られる時があった。それを万葉集巻第三 420「石田王卒之時丹生王作歌一首并短歌」がいう(長歌部分)。

わが屋戸に 御諸を立てて 枕辺に 斎盆をすゑ 竹玉を
間なく貫き垂り

屋戸の全例を前提して考えると、このミモロは、おそらく戸外に立てられたのである。そして「ユフかけて祭るミモロ(万 1377)・ミモロのまそ鏡かけて(万 2981)」もみえるから、ユフや鏡かけられたこともあったであろう。

(なお、このミモロの葬礼とかかわっていることが目を射る。が、継体紀七年九月に引かれる「(安閑)天皇の挽歌」とされる歌謡 No. 97 に、おそらく山の一部のミモロの上で、竹笛が奏されたことが知られる。ミモロと葬礼とのかかわりを示す他の一例であった。)

ヒモロキについて次にいう。この語は、書紀に数語 3 件、万葉集に 1 語しかみえぬ。表音表記例は「比莽呂岐」(崇神紀六年)・「紐呂寸」(万 2657)。漢字表記例は書紀中「神籬」に統一されている。また、その語解は、諸説を通じて「ヒは靈。モロはモリと同じ意。(中略)キは不明(木や城の音ならば乙類の音。ヒモロキのキは甲類の音)。後に神社の意にもいう」(ここには底本書紀神代 p. 153 頭注による)とされる。が、筆者は、この「神籬」という用字について、二つの事柄をまず思う。

一つは、そのキ音の意味についてであって、同じく甲類であって意味不明とされる「カキ(垣・籬)」のキの

意と見たい。するとカは、「処・場所」の意であることはほぼ分明であるから、キに本来の「分ち隔てるもの」としての意がふくまれていたと考えられることになる。一つは、「神籬」という用字は、「籬」に主点のある表記法であることは動かぬから、実体はともかく、その思想的内容において、神のものを俗とへだて確立したきために発する、ヒモロキにおけるカキの重要性が想定できる。そしてこのことは、ミモロ第Ⅱ類「神地」に云った、これを区画するものとしての「標」と極めて相通ずるとしてよいであろう。そしてこのように解する時、万葉集(十一—2657)の、

神名火に ヒモロキ立てて 斎へども 人の心は 守りあへぬもの

は、連想上、一層の深みで理解し得ることになるであろう。いうまでもなく、カキが「隔て守る」ものだからである。

なお、この歌には、仮定法的なニュアンスがつきまわっているけれども、神の寄り来るとされた神聖地に、ミモロ第Ⅲ種に近いものが「立て」られたかと思われる。

このようにいうのは、ヒモロキには一面、運搬可能という性格がつきまわっているからである。それは、ヒモロキにとって忘れてはならぬことで、書紀第1件(神代第九段一書第二)は高皇産靈尊の勅中に、

「吾は天津神籬及び天津磐境を起し樹てて、当に吾孫の為に斎ひ奉らむ。汝、天兒屋命・太玉命は、天津神籬を持ちて、葦原中国に降りて、亦吾孫の為に斎ひ奉れ」

とみえる。天津磐境の運ばれなかったことが、同時に語られていて、目を射る。

また、第3件は、垂仁紀三年にみえる天日槍が将来した「七物(細注中、八物)」の神宝中の一種で、「熊神籬一具」である。新羅より舶載され来たのであった。「クマ」の意、不分明であるが、他の神宝は、玉とか小刀、また鏡・杵のごとき比較的小さいものばかりであるから、このヒモロキのスケールの小が推定される。以上の2件を通じて、今の筆者の念頭には、おそらくは小樹(またはその象徴)を垣でかこい、それに長柄をつけた、神輿の原形のごときものが画かれている。

しかし、すべてのヒモロキが運搬されたとも考えられぬことは、先の万葉集歌や、書紀第2件(崇神紀六年)が語ろう。それは、次の如くである。

故、天照大神を以ては、豊鍬入姫命に託けまつりて、倭の笠縫邑に祭る。仍りて磯堅城の神籬を立つ。

ここでも「立つ」とあるのが注目される。また、このイメージとしては、先にミモロ第Ⅱ種「神地」に云ったように、カキ(またはその象徴としての石の壇)で聖別され、おそらくは聖樹を主としたものとみたい。(但し、広大なスケールを持たなかったとみるのは、上の運搬可能性とのかかわりが忘れられぬからである。)かくして、ヒモ

ロキのイメージは、ミモロと重なるし、またモリとも合一するのであるが、それを次にふれる。

§5. モリ(モロ)のイメージと「社」

本節では、上に述べてきたヤシロ・ミモロ・ヒモロキと、モリのイメージとが、いかに結合するかにつきふれたい。この時、はじめに、モリのフィジカルなイメージが問題となる。が、上代語におけるそれは、端的にいうと、a) 叢林として、b) 茂った単独樹木において、あったのである。

モリの叢林として存することは、現代においても同じ。で、ここでは簡単にふれるに止めたい。それで、ヤシロとのかかわりから2・3を拾っておこう。

斉明紀七年五月、天皇は筑紫に幸して、朝倉橘広庭宮を造営するに当り「朝倉社の木を斫り除ひて此の宮を作」った。「神念りて殿を壊つ」とみえる。宮を作るのであるから、用材として(また用地)として、多くの木を切り払ったのであろう。で、神は憤慨したのである。

また、天武前紀中、村屋神が祝にかかって「今吾が社の中道より軍衆至らむ。故、中道を塞ふべし」と教えた。これは叢林中に中道が走っているのであって、外部から望見し難ければこそ、神の教に意味があったのである。

風土記からは、モリ(社)の中に「寒泉」があって「縁郡男女、会集汲飲」した常陸国行方郡の「郡東国社(県祇)」のことを上げられる。

しかも叢林としてのモリは、何処にも存し得たと同時に、現実特に「山」と結びついて存したのであって、たとえば常陸国行方郡香澄里に「東山有社。榎槻椿椎竹箭麥門冬、往々多生」といわれるごとくであり、モリとミモロ山とは切り離し得ぬ結合を持っていた。すなわち、モリとモロは、言葉の近しさのみでなく、現実において、そのまま結合していたのである。

そして、上のことは、上代語モリが、おそらく巨木²⁸⁾、または樹形秀麗な、単独樹木でもあり得たことにおいて、いよいよ補強せられるであろう。2つの例を引く。

万葉集巻第十(1850)に、次がある。

朝な朝な わが見る柳 鶯の 来居て鳴くべき モリ(森)に早なれ

これは、若い柳が、春まだ早く、十分に茂らぬ状態を歌う。加えて、「早くモリになれ」を、一本の柳が短時間に森林になればと解することは不可能で、深々とこんもり茂って欲しい、と願っているのである。全集本頭注は「現在、山口県や福岡県では、一株でも茂り立つ巨木をモリということがある」ことを教えられる。(続けて「枕草子」の「森は」(207)段より、清少納言が一木をモリということをいぶかる文章を引かれる。十世紀末、中央では、モリはすでに叢林として存したことも併せて知られる。)

第二は、風土記出雲国意宇郡首の注記に見える次であ

る。

謂はゆる意宇の社^{モリ}は、郡家の東北の辺、田の中にある^{コヤマ}塹、是なり。囲み八歩ばかり、其の上に一もとの茂れるあり。

すなわち、周囲 14 m 余ほど（円形とすれば直径 4.5 m ほど）の盛り上った土の上に、一株の繁茂した樹木が立ち、それが郡の名を負う「オウのモリ」なのであった。「意宇社」は、この郡の神社名リスト中に見えず、モリと訓む蓋然性が高い。また郡の名を負う以上、人々から歴史的な由来あるものとして尊崇されていたことを推せられる。

しかも、このイメージは、先に見てきた、神地であるミモロ・ヒモロキのそれとそのまま重なることは動くまい。かくして、モリ・モロ両者を包摂する円環は完結する。

以上、モリ（モロ）において筆者のふれてきたイメージを集約すれば、次のように括り得られる²⁹⁾。

イ) 山。特に神なび山・ミモロの山。

ロ) モリ。叢林。

ハ) モリ。茂った、巨大な、または樹形秀麗な単独樹木。

ニ) ミモロ・ヒモロキ。「主」（聖樹または聖なるイハ）と、場所を限るカキとの結合した、整備された「神地」。

ホ) 臨時的なミモロ・ヒモロキ。特に後者では、運搬可能なものも存した。

これらは、概観して、コンモリとモリ上った目に立つ姿を持ち³⁰⁾、比較的に自然的なもので、かつ、天に開かれており、神とのかかわりの深さにおいて存したのである。そして、上記の中心となるロ・ハ・ニをとると、第3節に紹介した中国古代の「社」のイメージと、いかにも共通点が多く、その相似性に驚ろかれる。すなわち、かかる共通性・相同性において、わが国のモリ・ヤシロは、「社」によって表示され得たのである。これらこそ本来の「社であるモリ・ヤシロ」と遇することができよう。

また、これを逆にみると、わが国のヤシロの決定的に「社」によって表示されていたことは、上代語モリ・モロによってイメージされるものから、わが国のヤシロが多く発生してきたことを、そのまま物語ると考えられよう。これこそ、ヤシロの範疇とイメージを示す三角形の底辺の一極に、モリ（モロ）を設定したことの確からしさを立証するものと考えるのである。（'82.8）

注

- 1) 既刊拙稿「社とモリ」（昭和 55 年度大会 9052）がある。
- 2) 延喜神名式に、当時全国の在神祇官社 2861 処を掲げる。出雲国をみると、風土記所載の在官社数はほとんど変らぬから、不在官社数を合わせると、遙かに上を越える。
- 3) たとえば、福岡県岩戸山古墳のそれなどが想起される。なお、風土記常陸国新治郡笠間村条中、油置売命の「社」

のうちに「石屋」があり、そこに引く俗歌中に「イハキ（石城）」がみえる。古墳の石室かと考えられている。

- 4) ヤシロは「所・処」で数えられる。延喜神名式中、「尔波神社」・「大庭神社」等をも拾える。
- 5) 伊勢関係の「斎宮」が想われるが、特殊である。前章参照。
- 6) これは鹿島神宮の場合であるが、風土記常陸国同条は、「神の社の周匝は、卜氏の居む所なり」という。
- 7) 既刊拙稿「社にかかわるコソについて」（昭和 57 年度大会 9045）がある。
- 8) 『古事記総索引』昭和 49 年平凡社刊による。
- 9) 注 1 の拙稿では、定訓と考えられる 15 例のみをあげた。
- 10) 『日本書紀総索引』昭和 43 年角川書店刊による。
- 11) 植垣節也：『風土記の研究並びに漢字索引』昭和 47 年風間書房刊による。
- 12) 小島憲之：『上代文学と中国文学・上』第四編第二章第一節の注 5 に、「社に関する詳しい」論として、A・D を掲げられる。
- 13) ここでは同氏『中国考古学研究』昭和 31 年東大出版会刊所収による。これには「附記」（昭和 31 年）が掲げられていて、C 論文についての批判がみえる。
- 14) 上にふれた字形は『大漢和辞典』にみえる。また、同書は「社」の首に「くにつかみ」をあげている。
- 15) わが国上代人が、神を聖なるものとして抱えていたかについては、問題がひそんでいる。論は略すけれど、前章第 4 節に関連を述べておいた。
- 16) 底本書紀中、在朝鮮の「山」を「ムレ」と付訓する例は多い。mori と関係しよう。底本書紀下 p. 85 頭注 29 参照。
なお、紀歌謡 No. 116 中の「乎武列」をこの利用とみる説がある（『古代歌謡集』p. 303）。すると、記歌謡 97・紀歌謡 75 の「ヲムロがタケ・ヲムラのタケ」なども気にかかる。
- 17) 『大神神社史料第八巻』昭和 56 年同社刊の p. 260 に梅田義彦「茂侶神社—三輪明神の分祀」がある。
- 18) 94, 156, 324, 420, 1059, 1093, 1094, 1095, 1240, 1377, 1761, 1770, 2472, 2512, 2981, 3222, 3227, 3228, 3231, 3268, 4241,
- 19) 全集本万葉集 94 の頭注は「三室戸山」を注して、「ミモロノ山に同じ。ミムロトはミモロノの訛音」とされる。筆者もこの見方に従う。ただし、ムロ（室）そのものにモロ・モリと同じく聖性がひそむものとする考え方があり、建築史の方で、もっとも強くこの考えをうち出されたのは、池浩三『祭儀の空間』昭和 54 年相模書房刊である。論すべきことは多いが、省略にしたがう。
- 20) 出雲国大原郡に「御室山」はみえ、スサノヲが「御室」を造ってここに宿ったので、かくいうとする。
- 21) 大場磐雄『神道考古学論攷』再刊昭和 46 年雄山閣版。
- 22) 同上『祭祀遺蹟』昭和 45 年角川書店刊。
- 23) 景山春樹『神体山』昭和 46 年学生社刊。
- 24) これは、常陸筑波山や大和二上山のように 2 峯あれば、2 座と考えられ、伏見稲荷のように 3 峯あれば、3 座と想定されていることで明らかである。注 22 所収の「考古学から見た神社の起源」に注意されている。
- 25) ここでは、同氏「春日大社・興福寺総説」による。『春日大社・興福寺』昭和 36 年、近畿日本鉄道 K.K. 刊所収。
- 26) 風土記出雲国神門郡に、何例かがみえる。底本は「神領国への入口のしるし（鳥居のごときもの）」とされる。

- 27) 堀口捨己『庭と空間構成の伝統』昭和40年鹿島出版会刊の第35図にきわめて美しい写真が掲げられている。
- 28) 巨木がそのことだけで、神と近しかったことは、上代四文献中の「巨木説話」群によって知られる。別稿でふれたい。
- 29) 本来、ハ・ニの間に、同じく天空に開かれた自然的なも

のとして「聖なるイハ」を加えて考えるべきであり、筆者は、これを忘れていないが、紙巾により加えられなかった。

- 30) 『岩波古語辞典』は「盛^もり」の項に「モリ(杜・森)と同根」とされている。

(昭和57年9月11日原稿受理日、討論期限昭和58年9月末日)

SYNOPSIS

UDC : 72.03 : 726.139

“MORI (MORO)” AND “SHA (社)”

by Dr. NORIKUNI KIMURA, Professor of Meiji University,
Member of A. I. J.

This paper is the third part (the fourth chapter) of the thesis “A Fundamental Study on Yashiro in Ancient Japan”, and consists of the following five sections.

- § 1 “Mori” and the image of “Yashiro”.
- § 2 “Mori” in the 8th-century literature in Japan.
- § 3 “Sha (社)”.
- § 4 “Mori” and “Moro”.
- § 5 The image of “Mori (Moro)” and “Sha (社)”.